

卷末資料2

京都大学博物館 学術映像博覧会 2009

京都大学総合博物館 学術映像博 2009 企画展示

「水・土・火と生きる風景：在地の昔と今をつなぐ」

本プロジェクトでは、2009年8/5(水)～12/13(日)に開催された「京都大学総合博物館 学術映像博 2009」において、「水・土・火と生きる風景：在地の昔と今をつなぐ」と題した企画展示を行いました。展示期間は9/16(水)～10/25(日)で、3つのFSでの取り組みをパネルや映像、模型展示などを通じて紹介しました。この映像博で用いたパネルを、巻末資料2として本報告書に添付いたしました。

守山FSでは、エリ漁に用いる網や魚の模型を展示しながら、琵琶湖のエリ漁を紹介しました。エリ漁から見えてくる琵琶湖の現状、琵琶湖漁師の生き方や知恵を実感してもらえたと思います。亀岡FSでは、筏士の諸役を免除した豊臣秀吉の朱印状や筏の絵図などを展示し、保津川の筏流しの歴史や文化を紹介しました。また、筏流し復活へ向けた現在の取り組みを通して、流域の人、山、川、町のつながりが再構築されていく様子をパネルや映像で紹介しました。朽木FSでは、野山への火入れが作り出してきた草山の景観の変遷を、古地図や空中写真を用いて紹介しました。かつての暮らしに不可欠だった茅や柴を採集するための火入れが、社会変化のなかで次第に失われ、草山が木山へと変わってきた様子がわかりました。

また、これらの企画展示のイベントとして、9/12(土)には筏組みのワークショップを行いました。このワークショップでは、9/9(水)に保津峡・落合から嵐山へ筏を組んで流した木材の一部を京大博物館に運び、亀岡FSの河原林研究員の指導の下、参加者全員で筏に組み直しました。この筏は、京大博物館の1Fホールに展示しました。また、筏の横には、保津川の流れをイメージしたタケのオブジェ(草月流奈良県支部制作、亀岡のマダケを使用)を展示いたしました。

また、9/30(水)～10/4(日)には、特集期間として、各FSの活動を紹介する以下の映像作品を上映するとともに、特集期間後半の10/3(土)～10/4(日)には、以下の2つのトークイベントを行いました。

映像作品

「琵琶湖に生きる風景」(守山FS、制作：武藤恭子・嶋田奈穂子、7分)

「保津川筏復活プロジェクト」(亀岡FS、制作：保津川筏復活プロジェクト連絡協議会、16分10秒)

「焼畑プロジェクト余呉：火入れ」(朽木FS、制作：井上一、7分15秒)

トークイベント

「琵琶湖に生きる」

日時：10/3(土) 15:00～16:30

内容：琵琶湖漁師の戸田氏をお招きし、琵琶湖の環境と魚からのメッセージを語っていただきました。「琵琶湖を守り、監視してくれていたのは、魚である。命を張っている魚に比べたら、人間はまだまだ甘い」(戸田直弘「わたし琵琶湖の漁師です」より)。

『筏がつなぐ「ひと」、「もの」、「ちいき』』

日時：10/4(日) 10:30～12:00

内容：亀岡市文化資料館の黒川館長、元筏士の上田氏、酒井氏、鍛冶職人の片井氏をお招きし、保津川の筏復活の活動を通して、これからの「ひと」、「もの」、「ちいき」のつながりを、筏復活に関わる関係者と共に語り合いました。

守山フィールドステーション

企画展示





エリ漁のふるさと ー守山市 木浜ー

エリ漁とは、琵琶湖における最も古い漁法の一つです。

中でも、滋賀県守山市の湖岸の人々は古くからエリ漁にたずさわってきました。特に、木浜ーこのはまー（現：守山市木浜町）は「エリの親郷」と呼ばれています。エリの設計や施工に秀でた「エリ師」と呼ばれる人たちがいたの

です。彼らは琵琶湖にとどまらず、日本各地からの依頼を受けて、エリを造りに赴いたといえます。木浜は、琵琶湖だけでなく、日本のエリ漁の中心であったとも言えます。



魚を「待つ」漁法 ーたまに、待ちぼうけー

エリ漁は、魚の習性を利用して、魚を「待つ」漁法とされています。

毎年11月から8月上旬にかけて行われます。魚の通り道に木や竹を打ちつけて、そこに竹箒や葦箒をたてて魚を導きます。最後には、習性のために逃げることのできない「ツボ」に魚を集め、網ですくって獲ります。

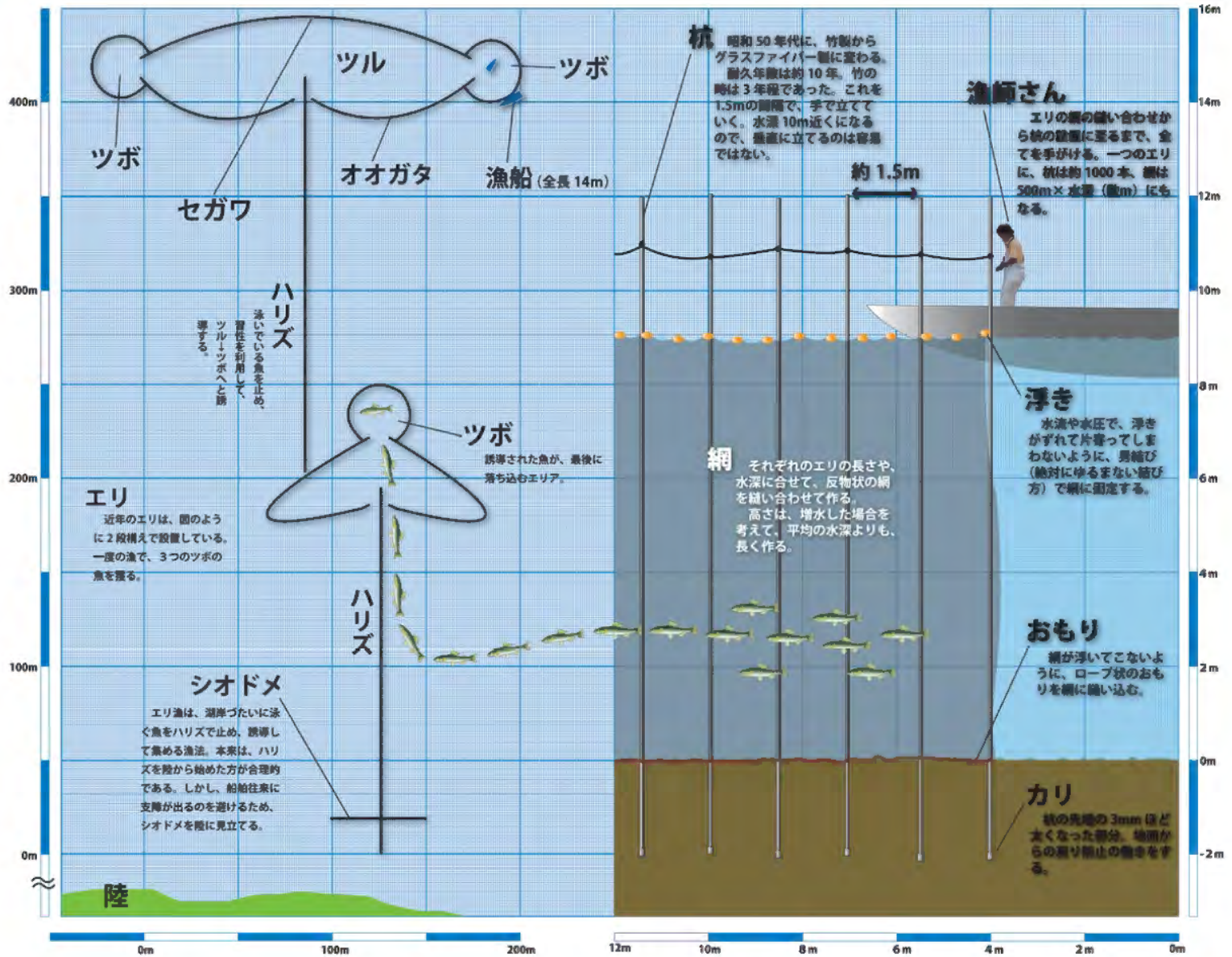
現在では、木や竹がグラスファイバー製に代わり、竹箒や葦箒が化学繊維の網に代わりました。これによって、エリの施工にかかる労力が軽減され、耐久性が増しました。エリ漁が変化したのは、ほとんど材料のみで、本質的には古代から何も変わらず、現在の漁師に受け継がれています。しかし、漁獲量や獲れる魚の種類は大きく変化しました。














ここでは、琵琶湖の伝統的漁法であるエリ漁と、そこから見えてきた琵琶湖の環境や、そこに生きる漁師の姿を見たいと思います。



えり 魚の構造

びわ湖に生きる風景



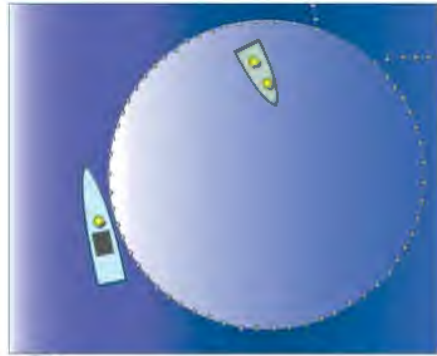
 アユ 17%	 ニゴロブナ 0.5%	 ウキゴリ 0.016%
 ワカサギ 2%	 ウナギ 0.3%	その他在来魚・・・ 0.6%
 ギンブナ 1.4%	 ホンモロコ 0.04%	 ブラックバス (オオクチバス) 77%
 ゲンゴロブナ 1.1%	 スゴモロコ モロコ類 0.02%	
 オイカワ 1.1%	 コイ 0.02%	エリで獲れる 主な魚と割合
 ハス 0.02%		

*割合(質量比): 守山漁業協同組合におけるエリ漁獲量(kg)およびエリによる外来魚駆除量(kg)(2008年11月1日~2009年8月10日)により算出

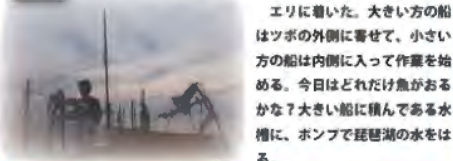


1 出港

2009年6月21日、午前4時、今日も守山市木浜の船だまりから、エリ漁に出る。空が白んでくるのが、ずいぶん早くなったな。活魚として持って帰る鮎を入れる水槽に塩を入れて、ト口箱などをつんだら、準備完了。今日は風もないし、ええ天気や。



2 エリに到着



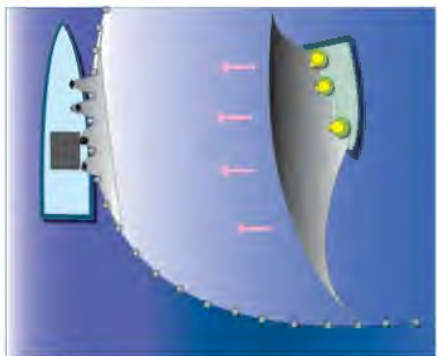
エリに着いた。大きい方の船はツボの外側に寄せて、小さい方の船は内側に入って作業を始める。今日はどれだけ魚がおるかな？大きい船に積んである水槽に、ポンプで琵琶湖の水をはる。



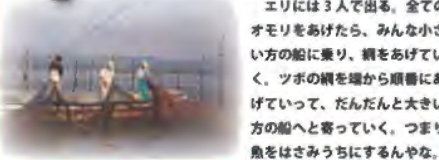
3 オモリをあげる



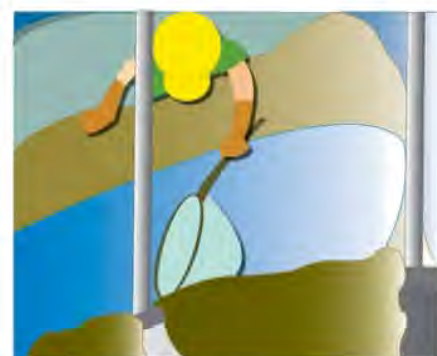
まずは、ツボの内側に下ろしておいたオモリをあげる。船の近くのオモリは、船にあげる。その他のオモリは、杭にぶら下げておく。



4 網をあげる



エリには3人が出る。全てのオモリをあげたら、みんな小さい方の船に乗り、網をあげていく。ツボの網を端から順番にあげていって、だんだんと大きい方の船へと寄っていく。つまり、魚をはさみうちにするんやな。



5 網ですくう



ツボの内側と外側の2艘の船が、1mくらいにまで近づくと、はさみうち完了や、魚がひちひち飛び跳ねる。まず、目の荒いタモで大きな魚をすくう。外来魚やな。そのあと、目の細かいタモで、小さい魚をすくう。



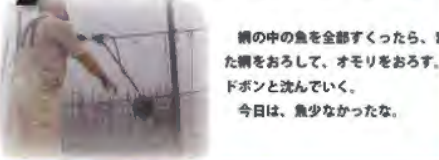
6 選別



すくった魚は、種類ごと、大きさに選別しなかん。その時には、選別するだけでなく、ゴモク(ゴミや水草)は取り除いてやる。今日はうなぎが入るとるな。小さいやつは、琵琶湖へ戻してやる。「大きくなってから、また入ってや」



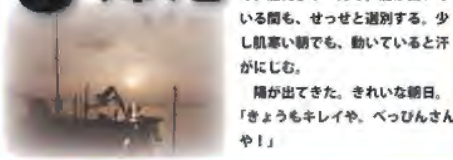
7 おもりをおろす



網の中の魚を全部すくったら、また網をおろして、オモリをおろす。ドボンと洗んでいく。今日は、魚少なかったな。



8 帰港



こうやって、3つのエリを回って、船だまりへ帰る。船が動いている間も、せつせつと選別する。少し肌寒い朝でも、動いていると汗がにじむ。陽が出てきた。きれいな朝日。「きょうもキレイや、べっぴんさんや！」

一網のメンテナンス



▲エリ漁で、網をあげる時には注意が必要。網が破れてはいないが、チエックしないとけないから。網の状態は、漁業量に直結する。船には、針と糸がつんであり、網に穴を見つげると、すぐに繕う。

守山

えり 魚

のめぐみ

びわ湖に生きる風景

	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
漁獲量 (kg)	3774.8	2160.2	358.2	1509.3	1653.7	1892.8	1268.5	4914.7	1269.4	174.8
魚種	アユ	アユ	アユ	アユ	アユ	アユ	アユ	アユ	アユ	アユ
	オイカワ	オイカワ		オイカワ	オイカワ	オイカワ	オイカワ	オイカワ	オイカワ	
			ニゴロブナ	ニゴロブナ	ニゴロブナ	ニゴロブナ	ニゴロブナ	ニゴロブナ	ニゴロブナ	ニゴロブナ
	フナ類	フナ類		フナ類	フナ類	フナ類	フナ類	フナ類	フナ類	フナ類
	ワカサギ	ワカサギ	ワカサギ	ワカサギ	ワカサギ	ワカサギ		ワカサギ	ワカサギ	ワカサギ
	ホンモロコ	ホンモロコ			ホンモロコ	ホンモロコ	ホンモロコ			
	スゴモロコ	スゴモロコ	スゴモロコ				スゴモロコ	スゴモロコ	スゴモロコ	スゴモロコ
	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ
					スジエビ	スジエビ	スジエビ	スジエビ	スジエビ	スジエビ
					コイ		コイ			
					ハス		ハス			
						ビワマス	ビワマス	ビワマス	ビワマス	
							ウグイ			

魚の種類と量

琵琶湖のエリ漁は、11月から8月中旬にかけて行われます。この時期は、漁師にとって、農繁期（農業が最も忙しい時期）ならぬ漁繁期となります。しかし、獲れる魚の種類や量は、常に同じではありません。

*守山漁協 2008年11月～2009年8月10日のエリ漁獲量より



1. わかさぎのてんぷら
2. ふなのあらい
3. かまつかのナレズシ
4. えびのかき揚げ
5. 餃子リ (インドネシア)
6. バナナの葉の蒸し鮎 (インドネシア)
7. えび豆

びわこの味、忘れんといてな。
(忘れないでね)



現在、琵琶湖は、在来魚（古来から琵琶湖に住んでいる魚）が生きやすい場所ではありません。在来魚を襲う外来魚がたくさんいるからです。Catch&Eatと称して、外来魚を食べようという動きもありますが、漁師はそれに賛成はしていません。外来魚を水産資源として認めてはいないからです。在来魚の美味しさを知ることによって、私たちに琵琶湖と在来魚について考えてほしいと願っているからです。また、漁協女性部は琵琶湖の味を受け継ぎ、伝える活動をしています。

びわこの味、忘れないで！



朽木フィールドステーション 企画展示





暮らしとつながる山の姿

— 映像資料からたどる景観の変遷 —

1. ^{くさやま}むかし、草山が広がっていた

山といえば、どのような風景を想像しますか？ 身近な山の風景として、下のような、樹木に覆われた風景が思い浮かぶのではないのでしょうか？



写真1. 滋賀県高島市今津町^{むくがわ}棕川から小原谷方面を望む。
(撮影：2009年8月)

いっぽう、下の写真は、大正時代にほぼ同地点から同方向を撮影したものです。



写真2. ほぼ同地点より同方向を写す。(撮影：大正時代、栗田俊栄氏所蔵)

上の2枚の写真を、とくに写真左側の斜面に注目しながら比べてみましょう。

現在、山の斜面には樹木がぎっしりと茂っています[写真1]。いっぽう、大正時代には、樹木は尾根の上に見えるだけです[写真2]。当時の斜面を一面に覆っていたのは草や低い灌木でした。このように、昔と現在では山の姿は大きくちがいます。

どうして昔はこのような草山が広がっていたのでしょうか？



2. どうして草山だったのか？

昔の山には、どうして草山が広がっていたのでしょうか？ 自然条件のため？ それとも、木を切りすぎたから？

そうでは、ありません。草山は当時の暮らしにはたいへん重要なもので、人びとがつくりだしてきたものでした。

それでは、草山はどのように利用されてきたのでしょうか？



写真3. 水田の後の山にも草山が見える。(棕川、撮影：大正時代)

■ 家と牛を支えた草山

当時の家屋の屋根は茅を葺いたもので、大量の茅を必要としました。また、田畑の耕起や物資の運搬に重要だったのが牛で、その排泄物と混ざった敷き草は水田の肥料となりました。屋根材としての茅、牛のエサや寝床となる草を採るための空間が草山だったのです。



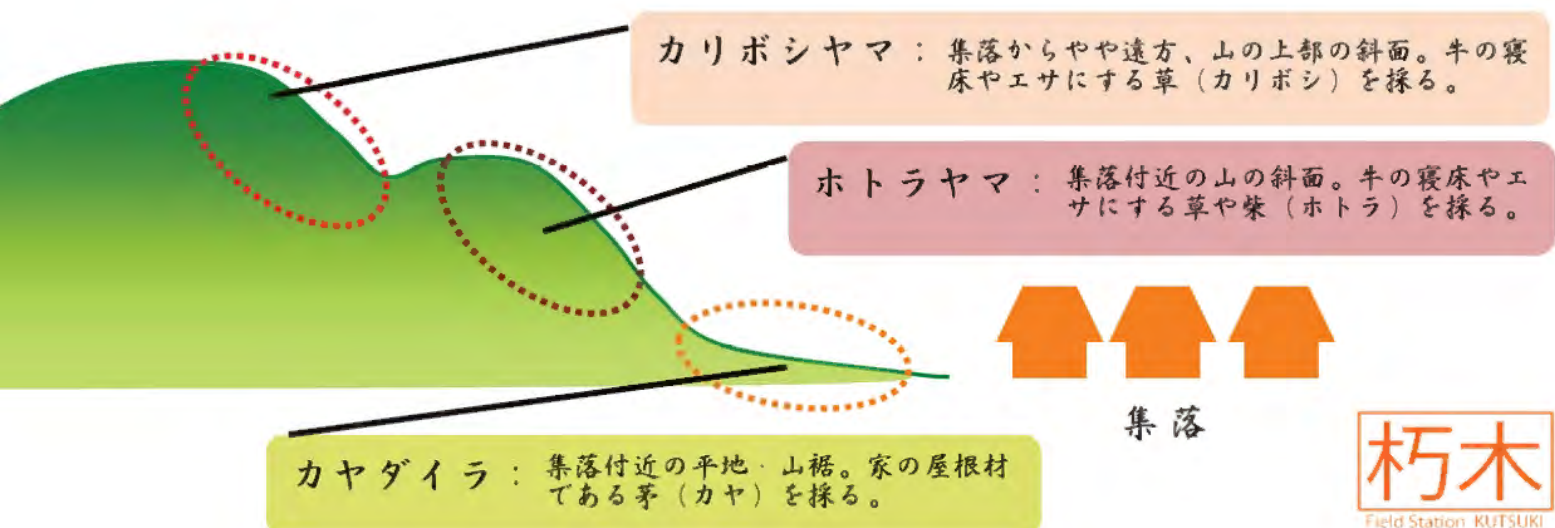
写真4. 茅葺き屋根の家屋 (棕川、撮影：大正時代)



写真5. 木材を搬出する牛 (棕川、撮影：大正時代)

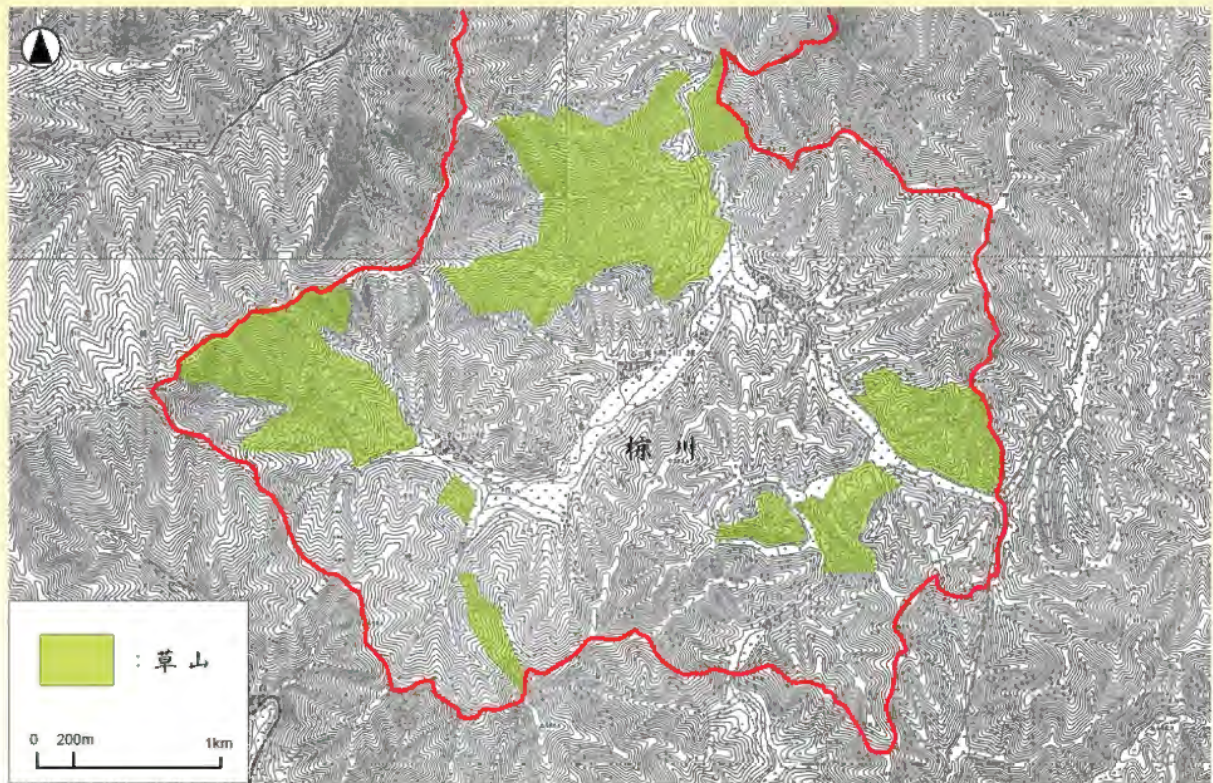
■ 草山の種類

草山は、利用目的と場所におうじて3つに区分されていました。



3. 草山の広がり

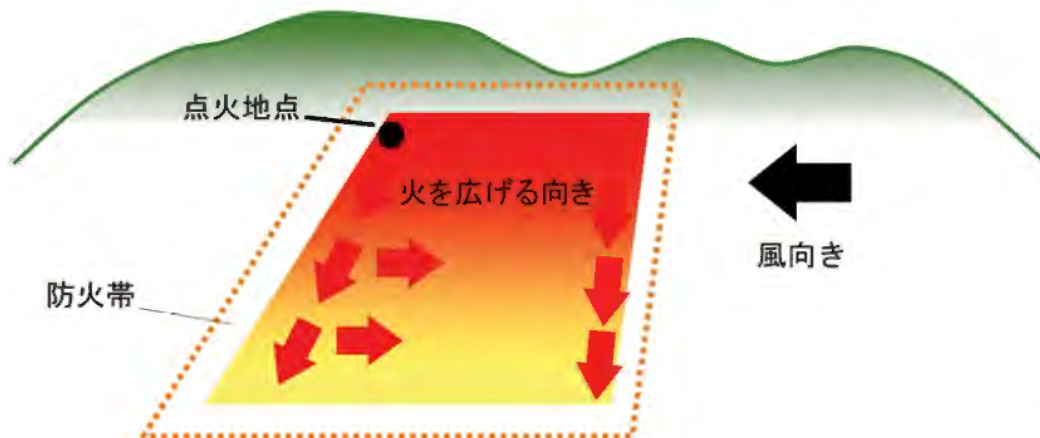
下の図は、明治時代の地形図（明治26年測量 同28年発行、縮尺1:20,000）をもとに、当時の草山の広がりを示したものです。この時の地形図には、植生の様子が詳細に示されています。それによると、草山がムラの領域のなかでかなりの広さを占めていたことがわかります。



4. 草山を維持するための技：火入れ

日本の気候条件では、草山をそのまま放置しておけば樹木が茂ってきます。そのため、草山を維持するには、人手によって樹木の侵入を抑える必要があります。定期的な刈入れと刈入れがおこなわれてきました。また、火入れにより良質のカリボシ・ホトラ・カヤが採れるといわれます。

火入れには適切な方法があります。椋川で火を入れる季節は春です。そして、天気や風の強さをみながら、火入れの日を決めます。また、延焼を防ぐために周囲には防火帯を確保します。さらには、火勢をコントロールできるように、斜面の上方・風下から火を入れ、徐々に燃焼部分を下ろしていきます。火入れは危険な作業であり、広大な面積を焼くために、共同作業でおこないました。

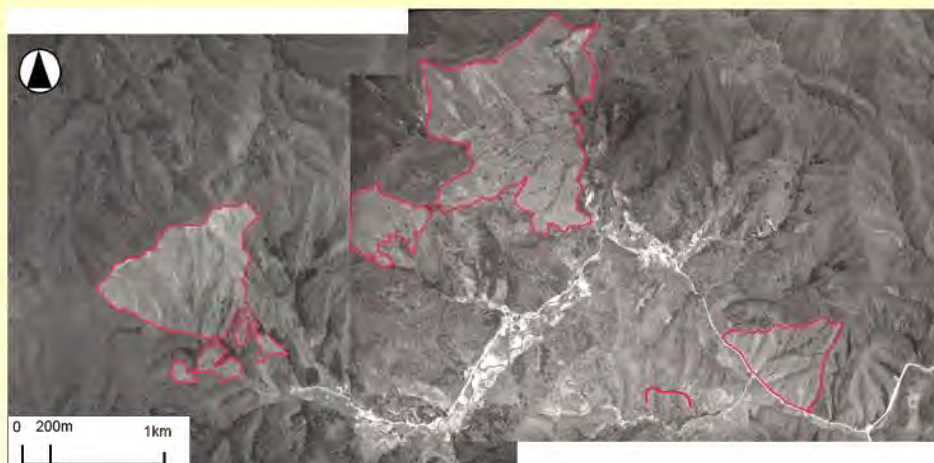


5. 暮らしと景観

こうした暮らしは1960年代後半ごろに急変します。化学肥料の普及や農器具の機械化により、牛は必要ではなくなりました。家の屋根もトタンや瓦を用いるようになりました。また、燃料として石油が広く使われるようになり、村の重要な収入源のひとつであった木炭の需要が一気に低下し、産業化の流れのなかで都市部に移転する人が増加しました。こうして草山は必要ではなくなり、山の景観は変化してきました。以下では、撮影時期の異なる航空写真を比べて、山の景観の変遷をたどってみましょう。

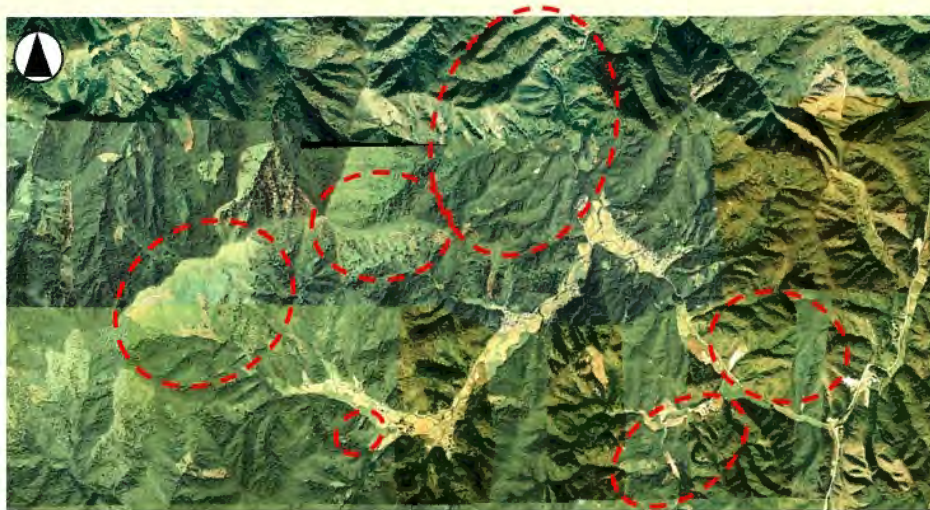
1963年

日本の農山村が急激な変化をとげる直前の様子です。明治26年測量の地形図とほぼ同じように草山が広がってます。そのほかにも、炭焼きのために伐採された林がパッチ状にあります。



1975年

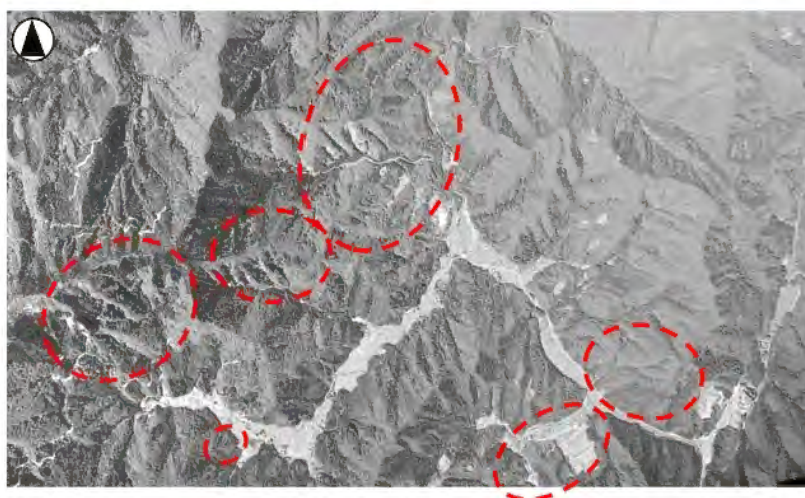
草山だった空間には、拡大造林政策によりスギが植林されました。斜面に見える縞模様は、植林のために地面を段状にしたところですが、植林されていないところでは、植生の遷移により樹木が成長しています。



2003年

里のまわりはすっかりと樹木で覆われています。

写真からはわかりませんが、国内林業の低迷で植林地は放置され、とくに近年の椋川ではシカの獣害により、山は荒れてしまっています。



草山は、ムラの暮らしと結びつくなかで生み出され、維持されてきました。そして、暮らしの移り変わりとともに人と山の関わり方も変化し、草山は樹木に覆われてきたのです。

6. 「くらしの森」をふたたび：朽木FSの取り組み

近年の山村では、人口の著しい減少と高齢化のために、生計活動をはじめ地域社会の維持が困難な状態になっています。こうしたなか、朽木FSでは地域の資源を活かした暮らしを創り出そうと考え、火入れによる林野利用に注目しています。

今日、生活形態の変化により林野への火入れはすっかりと姿を消しています。しかし、火入れによって林野の状態はつねに更新され、そのなかで山のもつ生産力を最大限に引き出すことができる、と私たちは考えています。また、生物多様性の維持にもつながります。

朽木FSでは、人の暮らしと森の豊かさが相互に結びついた森を「くらしの森」とよび、その再構築にむけた取り組みを滋賀県内の高島市棕川と余呉町で進めています。



棕川



休耕田での焼畑耕作



ホトラヤマ・カヤダイラの復元



牛耕による水田耕作

余呉



焼畑耕作にむけて林野を伐開



伐開地への火入れ



火入れ後の鋤入れ

亀岡フィールドステーション 企画展示



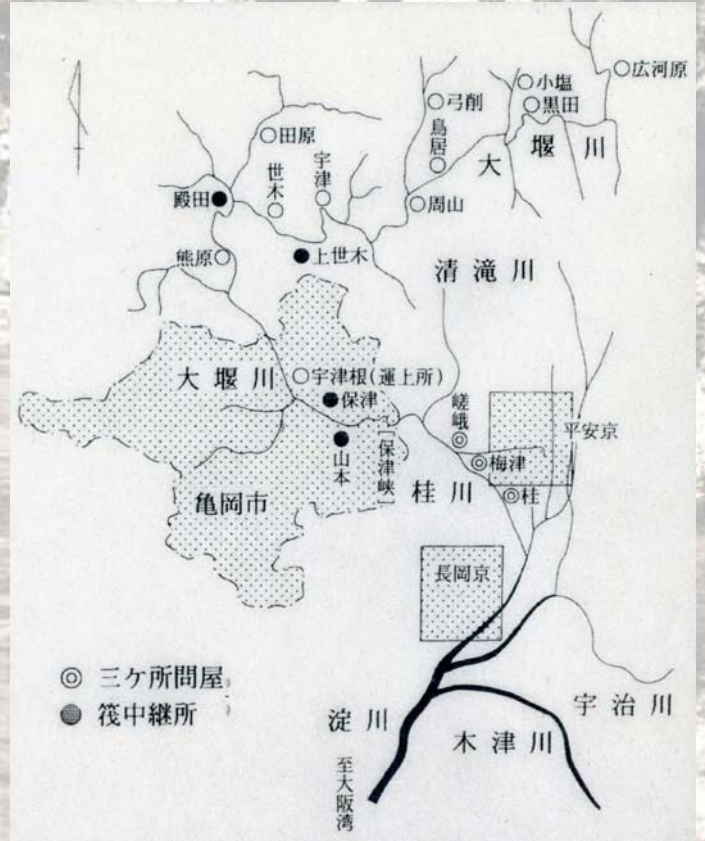
京都・大堰川（保津川）の筏の歴史

大堰川（保津川）の筏流し

大堰川の筏流しの歴史は古く、8世紀まで遡ります。特に延暦3（784）年の長岡京造営、同13（794）年の平安京造営に際しては相当な資材が必要であり、丹波国山国庄（現在の京都市右京区京北町付近）が禁裏御料地に指定され、造営用材の供給地となりました。木材の輸送は以後も行われ、『延喜式』巻34「木工寮」の項には瀧額津（たきぬつ、現在の亀岡市保津町付近）などの記述が見られます。中世にはこれらの津に「御間」（問丸）と呼ばれる筏の輸送業者が現れ、筏流しを専門とする筏士（筏師）も登場しました。

近世に入り城郭や城下町の建設が盛んになると、木材の需要は急増しました。丹波材の場合は、生産地である丹波の山々から京都・大坂などの消費地へ河川を通じての筏流しが可能であり、時の権力者も丹波材の輸送に欠かせない筏士の存在を重視し、羽柴（豊臣）秀吉は諸役（税）免除する朱印状を与えるなどしてこれを支配しました。江戸時代末期には経済の発達にともなって輸送量も飛躍的に増加し、最盛期には年間60万本もの材木が京都・大坂へと輸送されました。また、材木の生産や輸送だけではなく、発注や販売など筏流しに関連した活動が各地で行われ、流域で暮らす人々が様々な形でこれらに携わり、筏の中継地として栄えた大堰川流域の村々は現在の丹波地方の基礎を形作り、京都・大坂の町と人々の暮らしを支えていきました。

古代から近世にかけて大きく栄えた大堰川の筏流しですが、明治・大正期の山陰本線の開通や国道の整備によるトラック輸送の普及とともに次第に衰退し戦後しばらくして完全に途絶えてしまいました。



大堰川(保津川)流域図



豊臣秀吉朱印状（個人蔵）

豊臣秀吉が石川伊賀守・山口甚兵衛に対し、宇津・保津・山本の筏士による嵯峨までの用材輸送を命じた文書

保津川における筏

保津川・杉筏の基準サイズ

幅 二間二尺(約二・七M) 長さ 三〇間(約五五M)

カジボウ

カセギ

ハナ
ワキ
ソウ

猿尾
(サルオ)

保津川における筏のサイズは、保津峡の川幅の狭さや流れの激しさ等により、幅約2.7m、長さ約55mまでとされました。筏を細分化すると約12~13連の筏で構成されています。直径9cm以上長さ約4mの丸太を縦に並べ丸太の両端に檜の木と藤蔓を横には並べ、U字型のカンという金具を縦に打ち込み固定します。これで幅約2.7m長さ4mの筏が出来上がります。これを「連」といいます。これを縦に12~13連、藤蔓のみでつないでいきます。1連目からハナ、ワキ、ソウと呼び、特に重要視しました。なぜならばこれらの部分に筏を操舵するときに必要な舵が取り付けられるからです。舵を取る筏士は、ワキの筏に乗り込みハナの部分に取り付けられたカジボウを上下左右に動かすことで筏の舵をとっていました。

かつては、筏を2~3人で操舵していました。1人目は、ハナに乗り、岩などにあたらないように檜の竿で岩や川底を突きます。2人目はワキで舵を取り、3人目は筏の後尾で筏が岩に当たらないよう竿を突いていました。

全長約55mある筏を組み、保津川の急流を下ることは、熟練した技と豊富な経験に裏打ちされた伝統的な筏組・操舵技術によってなされるもので、その伝統技術・経験則をいかに後世に伝えるかが課題となっています。



カン、檜、藤蔓
で固定された筏



連と連を藤蔓
でつなぐ



ハナに据えら
れたカジボウ



竿と舵を巧みに操り
急流を下る6連の筏
(平成21年9月の筏流し)
本来はこの倍の長さの筏
を操っていました。

亀岡

Field Station KAMEOKA

京筏組 (保津川筏復活プロジェクト連絡協議会) の歩み

京筏組とは？

平成19年8月8日、京都府南丹市日吉町の日吉ダムのダムサイトにおける「天若湖アートプロジェクト2007」において筏組のイベントを開催し、3連の筏を作成しました。しかし、筏は実際、川を流れることはなく、日吉ダムのインフォギャラリーにおいて展示されたただけでした。

平成20年、戦後途絶えた保津川の筏流し復活を目指して、行政・NPO・市民団体・企業・大学等が集まって、「保津川筏復活プロジェクト連絡協議会」が発足しました。京都府亀岡市保津町在住の元筏士上田潔氏と酒井昭男氏からの聞き取り調査を実施し、同年9月10日、約60年ぶりに保津川の筏流しが復活しました。

平成21年、亀岡市に一軒のみとなった鍛冶屋「片井鉄工所」において約60年ぶりに筏組の金具「カン」が作られ、8月8日には日吉ダム直下で筏流しが行われ、そして、9月9日には保津峡の落合から嵐山への筏流しが行われました。

今後、「京筏組」は、筏復活プロジェクトを通して、地域の森林資源の見直し・活用、環境問題・歴史文化への意識向上、流域住民の「もの」と「ひと」のつながりの再構築を目指しています。

南丹市・日吉



日吉町での筏流し
平成21年8月8日、南丹市日吉町の日吉ダム直下で、筏流しが行われました。4連の筏が生まれ、子供たちが元気にパドルを漕ぎ、川を下りました。



天若湖アートプロジェクト2007
元筏士・酒井昭男氏指導の下、保津川下り船頭衆により筏3連が組まれました。元筏士から現役の船頭衆への技術の伝承の始まりとなりました。

南丹市・筏森山



筏森山における檜の伐採と葉枯らし
平成21年6月、南丹市八木町の筏森山において、檜の伐採と伝統的な葉枯らしが行われました。約2ヶ月、自然乾燥された材木は、8月8日、9月9日の筏流しに使われました。



亀岡

Field Station KAMEOKA



河況調査 上桂川統合堰～保津浜
平成21年5月27日、上桂川統合堰直下より筏航路の調査が行われました。この流域は昭和30年代まで多くの堰があり、今でもその痕跡が見られ、それが筏の航行に支障をきたすものであることも想像されるほど、筏流しにとって最適とはいえない河川環境となっていることもわかりました。

上桂川統合堰

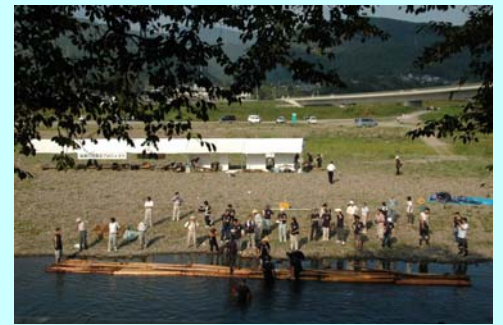


保津の元筏士

今も健在な元筏士は京北町に1人、保津町に2人だけとなりました。写真右が上田潔氏、左が酒井昭男氏。戦後、上流からの筏流しが途絶えると、主に、保津峡の渓谷内で筏を組み流す生活を送ります。保津川の筏流しの消滅まで筏流しの伝統を守ってきました。その後、保津川下りの船頭となり、人生の大半を保津川と共に過ごした川の達人です。



保津川筏復活プロジェクト2008
平成20年9月10日、約60年ぶりに保津川に筏流しが復活しました。元筏士上田潔氏・酒井昭男氏指の下、船頭12人による6連18mの筏が再現されました。



亀岡市・保津浜

亀岡市・京町



60年ぶりの「カン」づくり

平成21年夏、亀岡市内に1軒のみ現存する鍛冶屋「片井鉄工所」の片井操氏により、約60年ぶりに筏を組みむ時に使う金具「カン」が製作されました。60年前に先代の父と作った思い出の「カン」。60年の時を超え蘇り、9月9日、筏とともに嵐山へと・・・。



保津川筏復活プロジェクト2009
平成21年9月9日、保津峡・落合から京都・嵐山への筏流しが行われました。平成20年とは違って、足場の悪い、狭小な溪谷で、60年ぶりに作られたカンと筏森山の材木で、伝統的な筏の約半分6連24mの筏が生まれ、約5kmの急流を無事下りました。ゴール嵐山は大勢の見物客でにぎわいました。



保津峡・落合

京都市・嵐山

亀岡市・山本浜



かつての保津峡の筏流し
全長約55mの筏を巧みに操る筏士たち。舵を足で操りながら竿を差す姿は圧巻ですね。



かつての嵯峨嵐山の風景
渡月橋下流、臨川寺浜を筏が埋め尽くし、筏の上を通過して、対岸まで渡れたとも言われています。